

---

# 仲間思いの刀使い

雨月 夜葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仲間思いの刀使い

### 【Zコード】

Z9966Y

### 【作者名】

雨月 夜葉

### 【あらすじ】

暇だからさうにギルティクラウンの一次創作

仲間（前書き）

OP好きだ。

此処は、葬儀社の墓地である。

ガイと呼ばれるリーダーを起点として起きた組織だ。

政府と戦う葬儀社は、世間では、テロと呼ばれる行為をしている。

俺達、葬儀社が正義だと信じている。

そんな葬儀社には、仲間思いの刀使いがいた。銃のある今の時代に刀などと言つアンテイークを戦場に持ち出す人間は、いないだろ？。

葬儀社に女子供は、以外と多いそのなかでも若い刀使いは、何故葬儀社にいるかわからない

いつの間にか溶け込んでいた。

そんな刀使いは、何時でも他人を気にした。

「おー！ いのり！ ！」

「んつ？……何？」

「ちょっと座れ……腕見せろ……」

いのりの腕には、弾丸の掠つた跡が付いていた。

刀使いは、懐から一巻きの包帯を出した。それは、いい素材を使った高級な包帯だった。それは、怪我の多いのりが一番わかつていた。

「ホントに包帯の代金をいくらかける気だ？」いのり

「リョウ……心配しちゃう

「女の子なんだから肌は、大事にしなさい」

パスツといのりの頭に手を置いて微笑んだ。

「…………うん」  
いのりは、頷いてくれた。

「あまり怪我するなよ。包帯代だつて安くねえんだからなー。」

いのりは、トタトタと廊下の角を曲がつて消えた。

自室に戻らうとしたリョウを待っていたのは、

「…………」

猫のような格好をした少女だった。

目的は、何時も通りのハイスペックノートパソコンだ。ちなみにリョウの血作である。

「何やつてんだ？ ツグミー？」

リョウは、額に青筋を入れながら呟つと

「部屋のかたづけ?」

「疑問を疑問で返すな」

「シンーと固い拳がシグミの頭に落とされた。

「あやじやー」

お前は、猫か?  
シグミは、プログラムやハッキングに関しては、天才だが創作があり得意では、ない。

「ほれ」

ノートパソコンを保護カバーに包み渡した。

「いいの?」

上田遣いで聞いてくる。

「んついらぬいのか?」

恥ずかしくなつて味気なく渡した。

「ありがとうリョウ」

「はいはい勝手に人の部屋に入るなよ?」

「分かってるわよ

自室を汚くして帰ったツグミの件を諦めて自室で寝ていると  
自室を汚くして帰ったツグミの件を諦めて自室で寝ていると  
「リョウ? げつ何この部屋!」

「俺がこんな事するか?」

車椅子に乗るアヤセだった。アヤセは、さすがに車椅子で物が散ら  
かつた部屋に入つてこなかつた。

「あれ? ノートパソコンは? またかツグミがやつたの?」

「他に誰がいる?」

昔からノートパソコンノートパソコン煩かつたからなツグミは、何  
故か欲しがつた。

「手伝おうか?」

「わりいな

ツグミは、隠してあつたノートパソコンを探したのかやけに物が散  
らかつていた。しかも男物のパンツやらなんやらが出てきた。  
冷蔵庫から安物の「ーラを出した。

「"めん"ーラしかねえ」

アヤセは、「一ラを開けて飲んで

「まあいいわ。リョウの今回の作成やっぱいんでしょう?」

「…………情報は?」

「ツグミのハッキング」

リョウは、ハアーとため息を吐いて

「仲間内でハッキングしてビリすんの?」

「知的好奇心と言つて欲しいわね」

アヤセは、「一ラを」み袋に捨てて

「たまには、頼りなさいよ」

「すまん」

そんなやつとりをしながら少しすつ自室を戻して行つた。

アヤセとは、そこで別れて愛用の日本刀『黒燕』を腰に付けた。そこには、優しい刀使いは、存在しなかつた。ただ殺す為に動く鬼人になつっていた。その姿は、誰かに見られていたのには、気づかない

「頼むよ母さん」

黒燕にそつ語りかけ専用ポーチを腰にくくり付けた。

葬儀社の作戦室にリョウは、着くとそこには、ガイがただ一人その空間にいた。

「行けるか？」

「もちろん」

ガイとは、古い仲だ。母親の研究の近くにいた人間だからだ。

今回の作戦は、陽動である。それも大規模でかなり危険な場所に単独で先攻する。明らかに死ぬ。だが信じて疑わなかつた。葬儀社がガイが俺を殺すわけがない

「これは、あくまで自己推薦だ。任せとけ」

「頼む」

【細胞兵器開発課研究所】

目的は、新型兵器のデータ入手もしくは、強奪だ。使われた場合破壊殲滅が許可されている。

正門には、黒いコートを着ている怪しい男が現れた。その腰には、日本刀と質素な拳銃が一丁の軽装だ。

当然戦いに来ているつもりらしいがこの時代刀なんて使う人間なんてただのすげまくらいいだ。

だが全ての兵士は、その刀使いの気に恐怖を覚えた。

ライオンに睨まれたウサギのよつに震えた。

刀使いは、走り出した。黒く染まつた刀を握り圧倒的な存在感で…

恐怖した兵士は、持つていた銃を撃つが

キイン！

そのスピードは、光速だつた。銃より早く燕のように綺麗に弾丸を切り裂いた。いや、ただ刀を添えただけで切つては、いない

『正面ゲート敵1現在進行中繰り返す…』

ジリリリリ！と遂に本格的な刀使いの最後が始まつた。ただ平穏の為にただ仲間の為に刀を抜いた。

彼は、兵士の見えない速度で首を斬り飛ばし雄叫びを上げて叫ぶ。

「ただ守りたいだけなのに！」

兵士の首を切り取り刀は、さらに黒く染まる。

『止まらない！爆撃だ。ぶつ飛ばせ！』

させらるか！！

さらに脚に力を入れた。その速度は、既に人外である。RPGを持った兵士を斬り飛ばしさらにポーチから闪光弾を投げた。

ポンッと軽く弾ける音がして当たりに眩しい闪光が放たれる。

回りの兵士は、もろに閃光弾をくらいい怯んでいる隙に窓ガラスから部屋に侵入した。そこは、酷いなんてもんじやないそこには、結晶のような物が侵食した人間の姿だった。解剖されてさらには、剥製にされている。

一ヵ所に留まっているのは、危険なので通気口から研究所を回る事にした。ほとんど結晶化した人間か医者のような格好をした人間ばかりだった。

しばらく通気口を進むとガイの言つた通り例の細胞兵器専用らしいパソコンの前に行つた。

USBにオリジナルハッキングウイルスを入れた。

残り60秒…

残り50秒…

「動くな！包囲されてるぞ投降しろ！」

シャラン…

ゆつくりと日本刀『黒燕』を抜いた。「反抗意識を確認！撃て！」ありとあらゆる弾丸がリョウに飛んだ。

残り10秒…

確実性を求めるなら覚悟を決めなければならない。味方は、いない

弾丸を刀で弾き続ける。だが限界が近い…光速で連続で刀を振るの

は、無理がある。

残り5秒……

右脚に弾丸が刺さる。

残り4秒……

左手に弾丸が刺さる。

残り3秒……

左手から刀が弾け飛ぶ。そして

ターン！

胸に弾丸が刺さる。電子音がして細胞兵器の「データが葬儀社本部に届く。

「後は、任せた…みんな……」

CD買っちゃった。

虚幻（虚構）

文末をくだらぬ（――）

リョウが潜入して一日……

「何でリョウ一人に行かせたの！？」

ツグミは、ガイに抗議に走った。ハッキングして見た作戦は、作戦なんて言えない物だつた。部屋に入つたのは、準備不足で行かせない為に部屋に入つたのにあまりに何時も通りなリョウを見てそれは、ないと踏んで諦めた。だが彼は、昨日から帰つてこない。その意味は、死亡と言つことになる。

「あれは、本人の意思だ。自己推薦だつたんだ。俺から言つことは、ない」

「でも一人で特攻？ ふざけないで！！」

作戦室にツグミの大声が響く。彼女の考えは、もつともだがあの細胞兵器は、かなり凄い力を持つてゐる。誰も悪くないだが思わずツグミは、ガイに言い寄つた。

作戦室の扉が開き来年の細胞奪取計画の案の会議だ。来年の今頃に細胞兵器が出来る。リョウのデータのお陰で……

「さつきから大声だしてどうした？」

「ガイがキレるぜ？」

「仕事しますかね！」

といいに入るにこの兵士達は、まるでリョウを忘れたよつた言い方だつた。

「リョウが死んだのよ?」これが落ち着いてられる!?

するとシーンとそいつらは、黙つてしまつた。

「まさかみんな知つてたの?」

またもや彼等は、黙りこんだ。もうこの時点で知つていたのは、わかる。

「何でリョウが死んだのに平然としてられるの!?

すると左の会議室の扉からいのりが出てきた。

「リョウが……死んだ……?」

いのりも泣きそうな顔をしていた。いのりは、なんやかんやでリョウを尊敬し兄のような関係だった。

「いのりは、知つてたの?」

いのりは、顔を横に振つた。

「お前達には、伝えるなと口止めされてな

ガイも顔を背ける。彼も大分無理したのが伝わつて来る。

「アヤセは、感づいていたようだがな」

アヤセは、最後に片付けに手伝つて最後に立ち会つていた。

ツグミにしてみればこのつと回じでリョウを兄のように見ていた。

だから私達は、立ち上がらなければならない死んで行つたりョウの為にも細胞兵器奪取に全力を尽くそう。ただ優しかった刀使いの為に…

木曜日になれる

## 記憶（前書き）

一つ同時進行で書いてたら間違えた。

いのり…それが私の名前だった。

私は、少なからず絶望していた。あまり表情は、変わらないらしいが私は、これが兄なのかな～って人がいた。その人は、昨日任務で死んだらしい。私の腕には、兄…リョウが巻いた高級な包帯が巻いてあつた。リョウは、自分が傷ついてもケロッとしているが仲間の傷に極度に反応した。

私は、よく怪我をするらしいリョウいわく女の子なんだから肌を大事にしろ。と言っていた。

私がリョウに出会ったのは、葬儀社に入つて三日立つた頃だった。歩き回る事が許可された私は、歩き回っていた。

「お嬢ちゃん危ないよ」

「おいお嬢ちゃん」

「お嬢ちゃん戦うのかい？」

違う私の名前は…！

「ねえ名前は？」

この時から私は、兄…リョウを見つけた。

「……いのり…」

「このりかあ。いい名前だね。」

「うふ……」

私は、初めて名前を名乗れた。今ここに居るのは、彼のお陰だった。私の中では、彼は、太陽と表してよかったです。私は、リョウの意思を継ぐ……

### 【ある部屋の一室】

少年は、何もわからない……ただ何かを成すこと出来た。そう感じた。ただ分かるのは、今の居場所がベッドの上な事だ。

ガチャとドアが開いた。そこには、少年が一人入ってきた。

「お……起きたか。僕の名前は、シユウだ。よろしくな

「……俺は、……誰だ？」

「記憶喪失なのか？」

「わからないただ何かが待つてる気がする。」

「僕の母がこれ読めってさ」

【貴方は、こちらで観察されている人間です。君には、特異な力があるが一部の記憶が飛んでいる可能性があります。しばらく家に住んでください。なお腕輪を外したら電気ショックで死ぬ可能性があります。】

「家に居ろって事か？」

「僕が荷物預かってるよ。」

シユウの手に持った小さな荷物には、携帯食料とミネラルウォーターと【リョウ】と掛かれたポーチだった。

「リョウ?俺の名前?」

「よろしくなリョウ」

「ああよろしくな」

記憶（後書き）

神よ文才をつくっ！！

## 始まり（前書き）

何か転生のほうのアベが高じよー

## 始まり

時2039年

ここでは、10年前に突如繁栄した【アポカリップスウイルス】の蔓延によってロストクリスマスと言つ大事件が発生する。日本は、【GHO】の総治下に置かれる事になった。

俺は、

桜馬 リョウになり、桜馬 シュウと一緒に暮らしている。シュウも俺も互いに他人と距離をとりお互いは、一緒にいた。やはり一人は、心細い。

晩飯の用意が出来た。シュウは、いつものどこのだらつ。

屋上に行くとシュウは、やはりいた。有名なバンド【エゴイスト】歌をケータイで流していた。

ズキンッ！

エゴイストのいのりの声を聞くと頭が痛くなる。なぜかは、さっぱりわからない。でも何故か懐かしいと思える。

「シュウ！飯！」

やつと氣づいたシユウは、じつに来て

「ゴメン。ぼーっとしてた」

「誰だつてあるわ……もちろん俺だつて」

最後に咳いて晩飯を食べて就寝した。

「早くしないと置いてくぞ」

「待てよ」

シユウが先に行つたリョウを追い掛けてきた。

バックを持つて電車に乗つた。窓には、戦車やらなんやら武装している。刀持つてれば良かつたかな？

教室に入つても何も変わらないただシユウの回りには、二人の映像作るなんだつけ？部活仲間が居て揉めていた。だがシユウは、軽く苦笑いでスルーしていた。

俺は、机に伏せて空を見ていた。ああ平和だな…変わらない日常…飽きてきた。

放課後になるとシユウが机に来て

「すまん。僕帰るの遅くなる」

「暇だし付いていつていいか?」

「ああ。大丈夫」

映像部?そこは、元危険地域の名残がある建物でパソコンとイスと机しかない場所だが秘密基地には、凄いいい場所だ。

二人は、金網の間を通り抜け歩きにくいタイルを歩いた。前は、転んだがもう慣れた。

建物に入る前に「～～～」と歌が聞こえた。何処かで聞いた事のある美しい歌。

そこには、天使のような肌で回りの草の一本一本が輝いて見える。太陽の光が彼女を祝福している。ようだつた。

「いのりさん?」

シユウは、そう呟いた。確かに見た日は、エゴイストのいのりだが果して本人だろうか?

シユウは、歌つている所に近づこうとすると

カンッ！

地面に空き缶があり蹴ってしまった。直ぐやまわつ「こロボットが手からワイヤー・アンカーをショウの脚に巻き付けた。

いのりさんは、驚いて後ろに下がって机に頭をぶつけていた。

「ショウが悪い」

「ううー！」

何か女の子を襲ってるみたいになつてゐる…

そして何故か田を限界まで開いて俺を見ている。何事？

「兄さん…コモウ？」

…………兄さん！？そして何故か名前を知つてゐる。

「俺つて名乗つたか？」

グウー！

「「…………おにいさんつぐべる？」「

思わずショウとハモつてしまつた。

いのりさんはおにいさんつぐべるを食べ終わると

「つコウ……だよね？……葬儀社の

「葬儀社？テロに参加した覚えは、ないけど？」

シユウは、軽くいじけて映像編集している。

「ロンド橋落ちた落ちた。ロンド橋落ちた落ちた落ちた。」

急に凶んだように歌い始める。のりの前で座つてみると

「出来るようになった……リョウが教えた。」

「あやとりか……すまん覚えてない」

「戻つてガイに渡さないと……」

立ち上がりうとする。のりの右肩には、弾丸が掠っていた。俺は、  
ワイシャツの袖を破り包帯変わりに巻き付けた。

「懐かしい……？」

そんな感覚が頭から出でてくる。今までに内早さで何がが頭で弾けた。

ザザザツー。

するとGHのりしき人間が俺達を囮んだ。いのりは、直ぐさま一階  
から一階に下りて兵士に向かうが

「ハハ……」

銃の持ち手で殴られていた。「君達学生か？」

「は、はい」

シュウが答えると

「「」のテロリストと何をしていた？言わなければ殺すぞ。」

「いえ、僕らは、映像編集していましたし…」

兵士長の男は、「「」のテロリストめ！」と言つていのりを蹴つた。  
また何かが弾けた。今度は、完璧にバラバラに！

スンッ！

と移動して落ちていた鉄パイプを拾つた。「抵抗意識を確認。民間人の殺害を許可する！！」その時すでに鉄パイプを振り上げたりョウが立つていた。兵士の銃が全て空に浮いていた。

「待て民間人の少年よ…友達が死ぬぞ」とナイフをシュウに突き付けていた。

「くつ！」

「」で俺が捕まれば状況は、さらに悪くなる。

チラッと田に付いたのは、さつきシュウが鳴らした空き缶だった。  
勝負は、一回狙うは、ハゲの頭…いける！

強勒脚力で空き缶を蹴ると見事にナイフに直撃してナイフは、音を立てて転がっていく。

ガチャーンシャラララ！

俺は、懐に入り落ちたナイフをハゲ頭の腕に突き刺した。血が溢れ出して顔に少量の血液が付着した。

「！」、「！」は、引かせて貰おう

フラフラしながらハゲ頭は、撤退していた。

「逃がすか！ハゲ」

鉄パイプを持ち追い掛けようとすると銃弾の嵐が飛んできたので遮蔽物に隠れた。くそ助けられない！

「ふふふっ死ねテロリストめ！」

と言いながらハゲが手榴弾を投げてきた。俺は、それを爆発させないように鉄パイプで飛ばした。

「ちょっとと思い出した。俺、刀使いとか何とかアンティークマニアやらなんやら呼ばれてた気がする。」

手榴弾を弾くトレーニングは、小さい時からやつておりその部分の記憶が溢れ出した。

「くそつ僕は、何も出来なかつた！」

「シユウ……

しつかりしりーーー。まだやることがあるだ。この辺の守ったそれを地図の示す場所に行つて見てこーーー！」

「ニラウ……俺は、……

「たまにませ、お前じしくなことをしてこな

「僕じしくなことをせねばよな

「自分のやつたことと思つたことをしてこ

「僕らしくない」とつたいぢりすればいいんだ？ 悪んでも仕方ない行くしかないんだ！

Siue シュウ

「じゃあ俺は、いのりの捕まつた場所を探して来る。頼んだぜ」

「分かつた！」

行かなきや彼女が守つたこの試験官のみつのを守らなければーー俺は、

葬儀社の方へリョウは、いのりを探しに…

Side Out

Sideいのり

「さあ言え！貴様らのリーダーは、誰だ！」

目隠しされてわからないが車のような物の中だ。

「まだ言わんのかい！」

バチン！とバタフライナイフをいのりの頬に当てた。

「.....」

私は、言わない…死んでも失いたくない人が居るから…でもリョウには、会いたいもう一度だけ。例え忘れていても弱くてもあの人は、絶対にくる。

離れていても一緒だから…

「指令！」

「なんだ！？」

イライラしていて声がでかい耳が痛くなる。

「鬼人です。鬼人があの時の悪魔が生きていました…！」

「なにい！？あの百人斬りの奴は、死んだはずじゃー！？」

司令官が焦る。

「全部隊鬼人の討伐に迎えーー！」

Side Out

Side Out

今、黒い刀を腰に刺し黒いコートを着ていた。それは、あの時の事を再現するかのように思えた。

あの時？

ああ思い出した。そんな事したら記憶喪失したんだっけな？

ゾロゾロと人型兵器までもが投入された。さあやつてみよつか…葬儀社がくるか来ないか果してどっちだらうね。

人外の脚力で走り出す。それは、人型ロボットと同等のスピードを出していた。

「シッ！」

居合斬りを人型ロボットにかました。

Side Out

## Side シュウ

地図の表示してある場所は、広場のよつに広く巨大なマンホールが中央にある広場。

パパパパッ！

ライトが一斉に光僕の視界を埋め尽くす。光に慣れて目を開けるとクールでイケメンなイメージと外国人の白人の美形の青年に

「お前が桜馬 シュウか？」

「はい。一応……貴方がガイですか？」

「そうだ。では、聞こづ今暴れてる。鬼人とは、誰だ！」

「桜馬 リョウ……」

Side Out

Side ガイ

何？今こいつは、前に死んだ葬儀社の英雄のような人間の名前が出てきた。

【細胞兵器奪取計画】の土台となり死んでしまったはずの男。あいつが生きてる可能性は、限り無く低い……それにあのリョウが定時連絡を忘れるわけがない。

「ワカは、一年前に川で拾つた母が彼を息子にしておつてなつて養子になりました。」

とんだ性格の母親らしいがまあ自分の田で見なべぢや話にならない

「葬儀社は、これより行動を開始する。」

## 始まり（後書き）

じきじきペーパーだぜ。

救出と力（前書き）

寒い…手がかじかむ

## 救出と力

燃え盛る建物が体のアドレナリンを促進させる。何とも恐ろしい光景だった。

一個人の人間が兵器に勝利すると言つ結果が彼の強さを証明していた。

度重なる戦闘で「コードは、黒く刀は、どす黒い色をしている。建物は、炭化して当たりには、鉄屑が散っていた。日本刀【黒燕】は、鉄を斬ることも容易く切り裂く可能にしていた。今日の空は、朱い真っ赤だ。

遠くからモーターの回る音とローラーの回転の音がした。

バンッ！

巨大な鉛玉が発射される音がした。それは、反射的に出された刀に切り裂かれたが次は、三発のミサイルが飛来してきた。バックステップで一つのミサイルを回避して一つのミサイルを日本刀で真っ二つにする。

『なつー！？』

謎の音声が流れて驚いているのが分かる。何か聞いた事のある声の気がした。一瞬風が強くなりフードが脱げる。

『……』

急に大人しくなりゅうくり銃口を下ろした。

『貴方……ココウ?』

「んつアヤセか?」

『生きてたの!?』

「話は、後だ……来るゾ!—!」

ギャリリリリ!

鉄の擦れる音を出しながら敵の機体がアヤセ機体に突撃する。

『うつ…』

この機体は、ダイレクトで搭乗者と繋がつていて機体に損傷があると搭乗者もダメージを受けるシステムらしい学校で習つた。

俺は、アヤセの機体を踏み台に弱點と思われる頭部のコードを刀で斬つた。人間にしたら首の頸動脈である場所を無情に切り裂いた。

茶色やら黒やらの液体ががコードから溢れ出し搭乗者の悲鳴を残して機能を停止した。

『ありがとう次行がないと…』

『機体の損傷が多くある。撤退し!』

『でも…』

「冷静な判断をしろ。今の状態で機体を壊すわけには、行かないだろ?」

『……分かつた。撤退する。』

「その前にいのりが近くに居るはず何だが見てないか?」

「いのり?分かつたツグミにてえとく」

アヤセの機体を見送り次の軍隊の密集地区に走った。

Sideアヤセ

一年前に彼は、死んだはずだった。細胞兵器の奪取のデータ集めの時に単独潜入でデータを送ったのち死亡。とツグミのハッキングで判明していた。GHQの高いレベルの機密『ボイドゲノム』と呼ばれる兵器の時だ。

彼は、優しい。それは、葬儀社で一番と言つて言いくらいのお人よしだった。一年前だつて任務の日にもいつも通り笑つっていたがたまに寂しそうな表情をしていた。だが部屋で盗み見た彼は、人間なんかわからないくらい怖かった。刀と言つアンティークと呼ばれるくらい古い刃物を使う少年。「頼むよ母さん……」この言葉に少なからず私は、驚いた。彼の弱つた姿を見るのは、初めてだからだ。

彼だつて死にたくないだろ?……

そして次の日に彼は、居なかつた。

それから一年が立ち私は、この子（機密）を使って戦場を駆けていた。そして出願許可が出て何時間立つたかわからなくなつた頃に黒い格好の人人が現れた。

腰には、刀。様子見に銃を一発撃つと避けることをせずに弾丸を切り裂いた。

「くらえー！」

背後のミサイルを展開して三発のミサイルを放つた。それをバックステップで避けると刀を使いミサイルを切り裂いていた。

私は、驚いて声が出た。すると黒いフードが外れて素顔が現れた。その人は、誰よりも優しく誰よりも強い少年だつた。

Side Out

Side シュウ

葬儀社に行つて事情を話していると「敵襲だ！」全員が銃を持ち応戦に行く。

何も出来ない…どうすればいいんだ。やれることは、「シュウ…！ 今度こそ守つて見せる！」

そうだ。やらないと変わらない。『自分らしくないことをやるんだ』僕は、走り出した。

Sideいのり

いのりの車は、ミサイルの直撃でひっくり返っていた。運が良いのだろう手の拘束具を外して目隠しを取ると真っ赤な空が彼女を照らしていた。

全体を見渡す為に瓦礫を上ると

二体の大型の機体がいた。二体の機体の一體が気づいた。

力チャ

銃口がこちらを向いて引き金に指が掛かる

「いのりー！」

そこにリョウが来た。今、会いたかった人が走つて来る。

間に合わない。どちらかが死ぬ。死ぬなら立場的には、わたしだ。だが彼は、私を庇つた。何年立つても変わらない。



救出と力（後書き）

暇あれば投稿

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9966y/>

---

仲間思いの刀使い

2011年12月1日14時49分発行